

**「がっこう」は、百年たっても「学校」の表記の効果に及ばない。**

文字は、その発生からみると、表音主義者に言われるまでもなく、単なる符号に過ぎません。しかし、「だから、漢字でも、かなでも、慣れれば同じだ」というのは明らかに言い過ぎです。一口に「慣れれば」と言いますが、漢字の場合は、千数百年にわたって、すでに「慣れ」ができ上っているのであり、かなの場合は、これからその「慣れ」を作るうというのです。現実の問題としては、まったく問題にもならないことなのです。しかし、一般の人は、「慣れれば同じだ」と言われれば、これを額面通りに信用してしまうでしょう。これは大変恐ろしいことです。

かな文字論者が、「かなも慣れれば、漢字と同じ効果を発揮するはずだ」という、かな文字論者としての自信を内心に秘めることは結構です。しかし、それがまだ、海の物とも山の物とも見当のつかない現在において、「かなも慣れれば、漢字と同じだ」と公言するのは、どうみても軽率すぎます。私は、「がっこう」という表記は、どんなに慣れても、「学校」という表記の効果には及ばないことを指摘したいと思います。

「がっこう」という表記が、長い間使われていますと、この一かたまりのかなが構成している形象と、学校概念と、固く結びついて、その文字としての機能は次第に高まって行きます。この状態を「表音文字の表意化」と、ソシユールは呼んでいます。しかし、かな書きにはかな書きの限界があることを知らなければなりません。それは、どこまでで

も「表意化」であって、文字そのものは「表音文字」ですから、そのものずばりの「表意文字」に及ぶはずがないのです。宮城音弥氏は、昭和36年4月11日の産経新聞で、「慣れる心理を知れ」と言う表題で「漢字主義者は『慣れる』心理を知らず、慣れてしまったものを絶対によいと思い込んでいる人たちである」と言っていますが、そんな単純な考え方で片づけられては大変迷惑です。勿論「慣れてしまっている」と宮城氏の言う、漢字の「慣れ」の**事実**は、かなの「慣れ」の**可能性**よりは尊重されてよい(漢字の慣れは「手の中の兎」であり、かなの慣れは「藪の中の兎」ですから)と思いますが、それよりも、次のことを考えていただきたいと思います。

「がっこう」の「がっ」は、「がっそう(合奏)」の「がっ」「がっき(楽器)」の「がっ」と同じ表記です。「がっこう」の「こう」は、「こうざん」高山も鉦山もあります)の「こう」「こうせん(光線も鉦泉もあります)」の「こう」と同じ表記です。

このように、一つの表記が、多くの異なった概念を持つことは、第一に慣れを作ることを妨げます。この点、同じ表音文字ではありますが、英語やフランス語と同じ効果を期待することは国語では無理なことです。欧米語にも、同音意義語がないわけではありませんが、国語とは全然比較にならぬほどの少数ですから。そして、第二には、慣れができて、これでは紛らわしくて、読みの機能ががた落ちすることです。私たちは、言葉と文字との関係についてよく考えなければいけません。A国の言葉の表記に適する文字Bが、構造を異にするC国の言

葉の表記に適するとは限らないのです。このことについて表音主義者はあまりにも単純に考え過ぎています。今の表音主義者はまだ気付いていないらしいですが、中国では二千年も前に、この事実気付いているのです。

「工」という字は、「ものさしの目もり」から作られた文字で、(1)ものさし、(2)ものさしを使う人、つまり大<sup>工</sup>さん、(3)ものさしを使ってする仕事、つまり<sup>工</sup>作の意味に用いられました。後、意味がやや転じて、(4)仕事を努力してすること、(5)仕事をうまくすること、(6)仕事をりっぱになしとげることの意味にも用いられるようになりました。しかし、これらの六つの意味を、一つの「工」という文字で表記することは、機能的に思わしくないというので、(4)の意味には「攷[攷]」(これは教や政の旁で、『督励する』の意味を持つ)を付けて「攻」という字を作り、(5)の意味には「巧」という字を作り、(6)の意味には「功」という字を作りました。これで、同音の異なった概念(同音異義語)を区別して表記することになったのです。なお「工」には同音異義語として、(7)川の名(今の揚子江は音は単に「コウ」と呼んで「工」と表記していました)、(8)色の名(くれない色)、(9)筋肉の名、等がありました。つまり、同じ「工」という字が、ある場合は、川の名に、ある場合は色の名に使われていたのです。まったく表音文字として用いられたわけです。これも不便たというので、(7)は「氵(水のしるし)」を付けて「江」とし、(8)は「糸(白糸のことで、色々な色に染められたので、『緑』『紫』等色の名に多く用いられました)」を付けて「紅」とし、(9)は「月(筋肉のしるし、

元の形は肉)」を付けて「肛」という字を作りました。

このように、最初は、「工」という文字一つで「コウ」と発音される、いくつもの言葉を表記していたのですが、概念の異なる言葉は、文字そのものによって区別した方が機能的なので、区別する方法が次々と考案され「攻・巧・江・紅・肛」等の文字が作られたのです。

この漢字の発展の歴史を見ますと、発音の同じ、いくつもの言葉を、一つの文字によって表していたことが、漢字の世界にもあったことがわかります。つまり、漢字にも表音文字があったのです。しかし、それは機能的に表意文字に劣りますので、その欠点を補うために、表音文字の表意化を図ったのです。そうしてでき上がったのが、「表音文字＋表意文字」という構造を持つ「形声文字」だったのです。「形」は象形の形で、「ある概念を持った字」(主として象形文字)を指しています。「声」は音声の声で、「表音文字」を指している、と言ったらよいと思います。この形声文字は、全体の漢字の八割以上、九割に近い数を占めています。この意味では、漢字は、表意文字であると同時に「表音文字でもある」のです。この構成は実に見事で、文字の機能としては世界最高のものであると言ってよいと思います。ドイツ人やフランス人が、ローマ字ではなくて、漢字を用いていたとしたら、何と言って漢字を礼讃したのだろうか、と私はこれを楽しく考えてみる必要があります。

このような漢字の発展の歴史を見ることもせず、知りもしない人たち

から、漢字の原始の状態にまで逆もどりするような表記法をすすめられても、誠にありがた迷惑と言わなければなりません。

「コウ」と発音される言葉は、「**工**(攻・巧・功・江・紅・肛)」のほかにも、「**交**(郊・効・校・咬・絞)」「**構**(構・講・購・溝)」「**亢**(抗・坑・航)」「**岡**(綱・鋼)」等、ここに一々挙げ切れないうくらい多くの言葉があるのであって、これらの言葉は、「工・交・構・亢・岡」等の文字を以てしても処理することが困難であったから、( )内にあるような、多くの形声文字が作られたのです。こういう漢字の発展の歴史を知らないで、『『こう』』というかなだけで結構。慣れれば、漢字と同じ効果を発揮しますよ」とは、誠に驚き入った思慮のほどと、寒心せざるを得ません。

このように、少しでも深く掘り下げて考えて見ますと、「文字は、数が少ないほど便利だ」というのは、あまりにも、浅はかな常識論であることがわかります。それに、人間の頭の働きというものを誤解しているようです。

「進んで負えば、重荷も重からず」と古諺に言われていますが、いやだと思ふものは少しでも負担に感じます。しかし、意義や必要を感じて、自分から進んでやることは、どんなに大きな負担だって気にならぬものです。役に立たぬ機械は一円だって出すのが惜しいでしょう。しかし、必要とあれば、どんなに高価でも喜んで求めますし、どんな複雑な機械でも、喜んでその操作法を学ぶでしょう。決して、操作の煩わしさなど気になるものではなく、労を惜しむものではありません。

目的は、機械の働きにあるのであって、機械の扱い方の便不便是枝葉末節の問題です。

文字を道具にたとえるなら、私は、かなは自転車、漢字は自動車にたとえたら良いと思います。自転車は、構造が簡単で、わずかの操作で、どんな小道でも走らせることができます。それに比べると、自動車は、構造がずっと複雑で、その取り扱いの全般を学ぶには相当の時日と労力を必要とします。しかし、一たびこれを習得した上は、大通りを快速で走らせることができ便利です。自動車の通れる道は、自転車より制限がありますが、通れる道は、自転車より快適に走ることができます。これが、実に漢字とかなとの関係に似ているのです。漢字は、使用する言葉に、かなよりも制限が多くありますが、漢字で書き表すことのできる言葉は、漢字で表記した方が読みやすい便があるのです。また、構造が簡単で、学習してみれば意外にかなが習得しにくく、反対に複雑で学習が困難に見える漢字が、案外にやさしいことは、自転車と自動車の場合にもよく当てはまります。自転車はやさしそうでむずかしく、自動車は構造が複雑でむずかしそうですが、案外やさしいのです。だが、人は、見かけにだまされやすいのです。